

—SC—型動詞を中心とした、現代フランス語における、動詞変化再分類の試み

西 本 晃 二

((Je ne conseille à personne d'étudier la conjugaison des verbes ;
c'est de l'usage seul qu'il faut les apprendre.))

— Condillac —

本誌12号に島岡先生の「ロマン語における—SC型活用について」という論文が掲載された。そこで先生が論じておられるところ、フランス語動詞変化の分類について筆者が日頃考えているところとが、はからずも大いに関連しているので、このたび編集委員会から執筆を命ぜられたのを機会に、昨年春ある集りで行った報告を中心として、標記の問題に関する自分の意見をまとめてみようというのが本稿の狙いである。

周知のように、ロマン諸言語の中では、フランス語動詞の変化が、スラヴ語の影響を蒙って極端に複雑な変化をするにいたったルーマニア語に次いで、二番目に厄介であると考えられている。では、それほど厄介なフランス語動詞が、いったい全部でいくつあるのか調べてみると、むろん時々刻々に生成・消滅する言語現象の一つである以上、その数を正確に決定することなど出来ぬ相談ではあるが、まあ8000個足らずと考えても、事実からそう遠く隔ってはいないまい。⁽¹⁾

いま、土居寛之著「フランス語動詞活用表」⁽²⁾に従うなら、これら8000語弱の動詞のうち、不定法語尾として—erを有し、わが国で一般に行われている分類では「第1群規則動詞」と呼び慣わされているものが7294個、不定法語尾—irを有し、同じ分類によれば「第2群規則動詞」と呼ばれるものが382個、そして残りの300個に満たない動詞が、不規則変化として「第3群」に入れられているという。

こうしてみると、厄介といわれるフランス語動詞の変化も、実は動詞全体の4%にも足りない第3群の不規則動詞の変化が原因であることがわかる。そこで問題の第3群を見渡すと、いかにも雑然とした状態が目につく。この第3群は、群とはいふものの、そこには不定法が—er語尾の動詞も、—irあるいはそれ以外の語尾をとる動詞も、みないっしょに放り込まれており、とても「群」などと呼べた代物ではない。第1群と第2群とで規則動詞の変化を示し、第3群は不規則動詞ばかりを集めたのだといえ、そんなものかも知れぬが、それにしても、もう少し工夫がないのかと思うのは、筆者だけではあるまい。

それに大体、この1～3群の動詞分類自体にも問題があるのではなからうか。何事につけても画一的なわが国では、フランス語動詞変化の分類といえ、いま挙げた1～3群の分け方が、それこそ金料玉条のごとく、圧倒的な普及度で採用されている。だが、ことフランス語に関しては本国のフランス自体で、別にこのような分類だけが行われているわけでは毛頭ない。たとえば、プチ・ロベール辞典巻末の動詞変化分類をみると：(1)—er終りの規則動詞、(代名動詞その他は略す)、(2)—er終りの不規則動詞、(3)—ir終りの規則動詞、(4)

-ir 終りの不規則動詞, (5) -oir 終りの動詞, (6) -re 終りの動詞, といった分類をとっている。⁽³⁾ また、これは時代も場所も異なるが、17世紀初めに R. Cotgrave がロンドンで出版した仏英辞典巻末の動詞変化分類表を参照すると、変化を代表するものとして：

(1) Avoir, (2) Estre, (3) Parler, (4) Bastir, (5) Veoir, (6) Cognoistre の6基準動詞が挙げられている、といった具合である。⁽⁴⁾ とすれば1~3群分類以外の、もう少し憶え易い分け方を考えてみても好いのではあるまいか。

そこで今度は、やや時代は遡るが、フランス語の祖語に当るラテン語における、動詞変化の分類と、フランス語動詞変化との対応をみることにしたい。(表 I 参照)

表 I

latin		français			
分類	ind. prés. 1 ^{er} pers.	inf.	inf.	分類	ind. prés.
I	am - o	(< am - āre)	→ aim - er	1 ^{er} groupe	-e -ons
	cre - o	(< cre - āre)	→ cré - er		-es -ez
					-e -ent
II	gaude - o	(< gaud - ēre)	→ joui - r	2 ^e groupe	-s
IV	fini - o	(< fin - īre)	→ fini - r		
II	vide - o	(< vid - ēre)	→ voi - r	3 ^e groupe	-s
	tene - o	(< ten - ēre)	→ ten - ir		-t
III	dic - o	(< dic - ere)	→ di - re		-ons
	mitt - o	(< mitt - ere)	→ mett - re		-ez
III b	faci - o	(< fac - ere)	→ fai - re		-ent
	sapi - o	(< sap - ere)	→ sav - oir		
IV	senti - o	(< sent - īre)	→ sent - ir		

第 I 表をみると、ラテン語の第 I 群 -āre 動詞が、フランス語に入って第 1 群 -er 動詞になったことが判る。⁽⁵⁾ この群では代表の一つに creāre → créer が挙げているのをみても知られるように、語幹が母音終りの動詞もあるが、大多数は amāre → aimer 型の子音終りの動詞である。⁽⁶⁾ この群の直説法現在の変化語尾は：-e, -es, -e, -ons, -ez, -ent である。

これに対してフランス語動詞第 2 群は、ラテン語の第 II・IV 群に属する動詞が主体となって作られている。⁽⁷⁾ この第 2 群の特徴は、ラテン語動詞の時はどうであれ、フランス語動詞となった時には、語幹は母音 i で終りとなった点にある。i まだが語幹であることは、語尾変化(直説法現在なら -s, -s, -t, -(ss))⁽⁸⁾ ons, -(ss)⁽⁸⁾ ez, -(ss)ent) に関係なく、全時制の変化に i が顔を出していることで知られる。⁽⁹⁾ 従って第 2 群動詞の不定法語尾は、実は -ir ではなくて、-r であるということになる。

最後の第 3 群は、ラテン語動詞のうちで、第 III, III b 変化のものが中心となり、これに第 II, IV 変化の動詞中のあるものが加わって出来上っている。⁽¹⁰⁾ 従って、第 3 群が雑然とした混成部隊の様相を呈するのも当然のことといえる。表に掲げた第 3 群の動詞を一見して気のつくことは、不定法の語尾が -ir (-oir) の動詞と、-re の動詞が入っている点である。

-ir 語尾の動詞は、ラテン語第Ⅱ・Ⅳ変化の動詞から転化したものが大部分であるが、第Ⅲ変化からのものもないわけではない。⁽¹¹⁾-ir 語尾の動詞は、さらに-r 語尾（語幹母音 i で終り、第2群の場合と同じ）と、-ir(-oir) 語尾（語幹子音終り、直説法現在複数の変化で、語幹から i が消えることで知られる）とに分れる。

これに対し-re 語尾の動詞は、ラテン語第Ⅲ、Ⅲb 群から入ったものが大部分で、不定法-ere 語尾中、後から2番目のアクセントのない短音母 e が脱落してできた形である。(e. g. mettre < mittere, rompre < rumpere, prendre < prendere, etc.) この種の動詞は語幹末に、当然少なくとも2個以上の子音の塊りを有することになる。いっぽう、同じ後から2番目の短音母 e が脱落する際に、単独で脱落せず、語幹末の子音（主として c, d, g または b や h のこともある）を道連れにする動詞もある。(e. g. dire < dicere, faire < facere; croire < credere, rire < ridere; lire < legere; écrire < scribere; traire < trahere) この場合は、フランス語動詞としては、語幹が母音終りとなるわけで、従って-re 語尾にも語幹が子音終りの動詞と、母音終りの動詞の二種類があることになり、この群の複雑性をいっそう強めている。母音終りばかりの第2群、また母音終りを含むといっても、子音終りが大多数を占める第1群とも違って、第3群では母音終りの動詞と子音終りの動詞が、ともにかなりの勢力をもって共存しているのである。第3群の直説法現在の語尾変化は-s, -s, -t, -ons, -ez, -ent と、第2群と同様である。

以上みてきたところで、フランス語動詞には語幹が母音終りのものと子音終りのものがあることがわかる。そこで今度は、この事実と、フランス語動詞の語尾変化との関係を検討する番である。その際、問題となるのが直説法半過去の語尾変化に他ならない。表Ⅱの cant-āre の半過去の変化にみられるように、フランス語では、ラテン語や他のロマン諸語の場合と異なって、語尾中の子音 b (または v) が脱落し、-ais, -ais, -ait, -ions, -iez, -aient という半過去変化になっているが、⁽¹²⁾ そのうち複数の1・2人称-ions, -iez が特に問題となる。というのは、これまでみてきたように、フランス語動詞で語幹が母音終りの場合は、i 終りのものが圧倒的に多いからである。語幹が i で終わっているところに、語尾-ions, -iez をつければ：nous étudions, vous voyiez, nous croyions, vous riez の例にみられるように、〔ijõ〕・〔ije〕といった、母音や半母音（殊に i）の連続を避けることはできない。それだけではなくて、-ions, -iez が半過去・複数1・2人称の語尾であるとなると、語幹が i 終りの動詞の直説法現在1・2人称複数：nous nions, vous fuyez, nous extrayons, vous souriez など、半過去と紛らわしく聞えるおそれがでてくる。

第1群では、語幹が i 終りの動詞は数が少ないこともあって、こうした紛れを避ける手段は別にとられていない。しかし全群 i 終りの動詞だけで出来ている第2群ではそうは行かず、特別な手段が採用された。それが-sc-型動詞化に他ならない。-sc-型動詞化とは、起動相 (aspect inchoatif, ~し始める) あるいは反復相⁽¹³⁾ (aspect itératif, ~し続ける) を表す要素-sk- (-sc-, -ss-, etc.) を、動詞の語幹と語尾との間に挟み込んで、それぞれの意味を持たせるやり方である。この-sk-要素はインド・ヨーロッパ系諸語、ヒッタイト、アルメニヤ、ギリシャ、ラテン、更にはルーマニヤ、イタリア、スペインなどロマン諸語に広くみられる。島岡先生が、前掲論文で指摘しておられるように、⁽¹⁴⁾

表 II

inf.		cantare(latin)	cantare(ital)	chanter(fr)	cantar(esp)
sg.	1 ^{re} pers	cantabam	cantavo	je chantais	cantaba
	2 ^e pers	cantabas	cantavi	tu chantais	cantabas
	3 ^e pers	cantabat	cantava	il chantais	cantaba
pl.	1 ^{re} pers	cantabamus	cantavamo	vous chantions	cantábamos
	2 ^e pers	cantabatis	cantavate	vous chantiez	cantabais
	3 ^e pers	cantabant	cantavano	ils chantaient	cantaban
inf.		habere	avere	avoir	haber
sg.	1 ^{re} pers	habebam	avevo	j' avais	había
	2 ^e pers	habebas	avevi	tu avais	habías
	3 ^e pers	habebat	aveva	il avait	había
pl.	1 ^{re} pers	habebamus	avevamo	nous avions	habíamos
	2 ^e pers	habebatis	avevate	vous aviez	habíais
	3 ^e pers	habebant	avevano	its avaient	habían

-sk-(-sc-) 要素は、採用された当初は動詞の意味の変化を伴ったが、ほどなく元の働きを失って、ほとんど同義の動詞が二つ併存することになる。本来の機能を失ったのに、どうして-sc-型が消滅しないかという点、-sk-要素が附加されて動詞が補強されるためと、そして何よりも動詞変化の規則化に役立ったことが理由として挙げられる。

例えばイタリア語の *finire* では: *finisco, finisci, finisce, finiamo, finite, finiscono* と、-sc- 要素は、単数全部と3人称複数に現われるが、これが意味とは全く関係なく、アクセントを2番目の *i* の上に集めるために行われたことは、始めからその必要のない複数1・2人称に-sc-が現われないことから明瞭である。⁽¹⁵⁾ かかる規則化への要請は、言語では強いものであるから、-sk-(-sc-)型動詞は力を得、併存していたもう一方の動詞を駆逐したり、⁽¹⁶⁾ 名詞や形容詞から新しい動詞を作る際に活用されることとなって(e. g. *aboutir, rougir*), 規則動詞と呼ばれる集団を形造るようになる。⁽¹⁷⁾

フランス語においては-sk-要素は-ss-の形をとり、前出イタリア語の *finire* に対応する動詞 *finir* に現われるが、周知のように、その出現する人称・数は、複数1~3人称と、イタリア語とまさに正反対の位置であることは、-sk-要素が動詞変化の規則化に用いられていることを判然示して興味深い。

finir 型動詞の複数1~3人称で-ss-が現われるのは、先程から述べている: (1) 語幹が *i* 終りの動詞が直説法現在で半過去と紛らわしい形をとること, (2) 半過去で *i* が連続すること, の二点を回避するためである。しかし同じ語幹が *i* 終りで、語尾-rの動詞でも、-ss-をとらずに、*i* (または *y*) がそのまま語尾と接続する(従って第1群の *étudier, lier, employer, payer, etc.* に当る)動詞も、いくつか存在する: *ouir* (<*audio*>), *fuir* (<*fugio*>), *voir* (<*video*>), *asseoir* (<*adsideo*>), ⁽¹⁸⁾ *décheoir* (<*cado*→*cadéir*>)⁽¹⁹⁾ などがそれである。

また、現在では第3群に属するのだが、*finir* などより古い層で-ss-要素を採った一連の動詞に: *connaître* (<*cognosco*>); *croître* (<*cresco*>); *naître* (<*nascor*>), *paître* (<*pasco*>), *paraître* (<*pareasco*>), とその派生語がある。⁽²⁰⁾

さらにフランク語の動詞 *haben* から、*-ss-*を導入して *haïr* が作られている。⁽²¹⁾

i 終りの語幹をもつ動詞が問題であるとなると、語幹 i 終りで語尾 *-re* の動詞の場合はどうかという疑問が当然でてくる。実はここでもちゃんと *-ss-*によく似た手段が採られているのである。すなわち語尾 *-re* の場合には、同じ紛れや母音連続を避けるために、*-ss-*ではなくて、単独の *-s-*が複数 1・2 人称で現われてくる：*dire* → *disons*, ⁽²²⁾ *lire* → *lisez*, *suffire* → *suffisons*, *plaire* → *plaisez*, *faire* → *faisons*, *conduire* → *conduisez*, etc. ただし、このグループでは、語幹が母音終りになった原因が、ラテン語の語幹末子音の脱落にあるわけであるから、*-s-*は、*-ss-*のように新しい要素の追加ではなくて、脱落した子音の代替であると考えた方がよからう。じじつ *écrire*, *boire* の 2 動詞においては、複数で *-s-*ではなく、脱落した子音 *v* そのものの復活がみられる。*-s-*によって代替される子音は *c* (*dire* < *dicere*, *faire* < *facere*), *g* (*lire* < *legere*) である。

もちろん *-er* 語尾の *crier*, *lier*; 語幹 i 終りで語尾 *-r* の *fuir*, *voir*; などと同様に、語幹末の *i* と語尾との間に子音を挟まない動詞も存在する：*rire* (< *ridere*) → *n. riions*, *v. riiez*; *croire* (< *credere*) → *n. croyons*, *v. croyez*; *traire* (< *trahere*) ⁽²³⁾ → *n. trayons*, *v. trayez*, などがそれぞれである。

また、このグループには、語幹が *i* 以外の母音で終わっている動詞：*clore* (< *claudere*) ⁽²⁴⁾, *conclure* (< *con + claudere*) がある。これらは両方とも同じラテン語動詞 *claudere* から派生したものであるのに、*clore* (*verbe défectif*) は *ils clo-sent* から判るように *lire* 型で、語幹と語尾の間に *-s-*を挟み込むのに対し、*conclure* は *n. concluons*, *v. concluez*, と *rire* 型の変化をする。語幹が *o* 終りでは、半過去で *-ions*, *-iez* が来ると (実際は *clore* が *verbe défectif* であるから、そういう場合は直説法現在では起らない、しかし接続法現在で可能性があることに変りはない), *~o-ions*, *~o-iez* をどう発音するかという問題が起るのは避けられない。これに対し語幹が *u* 終りの場合は、母音の連続はあっても、[oi]か[wa]かといった難問は生じないので、子音 *s* を取らなかったであろう。

以上で語幹が母音終りの動詞は一通り目を通したことになる。そこで今度は子音終りの動詞を検討してみる番である。*-er* 動詞は先述の如く、母音終りも子音終りも区別なく扱っているので問題はない。ただ子音終りの中で、*c* と *g* で終るもの (*avancer*, *manger*, etc.) は *o* や *a* で始まる語尾 (直説法現在 1 人称複数, 半過去, 等々) の前で *e* をとること; 語幹末の子音の前が *e* [ə] あるいは *é* [e] である動詞の場合、法・時制・人称・数によっては、*e*, *é* が *è* になったり、語幹末の子音を重ねたりするのは、今更いうまでもない。この仲間、フランス語動詞の不規則変化の雄 *aller* が入ることもつけ加えておく。*aller* の変化の不規則性は、単一動詞の変化の枠をはみ出しているので本稿で論じることはない。

語幹が子音終りで語尾が *-ir* の動詞 — これこそが本当の *-ir* 動詞である — の代表的なものは：*dormir* (< *dormio*), *partir* (< *partio*), *sentir* (< *sentio*) など、ラテン語第 *N* 変化に属する動詞で、語幹末に子音の塊りを有するものである。ラテン

語では finir (<finio) などと同変化をしていたのに、フランス語に入って -ir を語尾とする、語幹が子音終りの動詞になってしまった。この仲間の特徴は、直説法現在単数で、語幹末に連続している子音の最後のものが脱落する点にある。

さて、これからいよいよフランス語動詞変化の一番厄介な部分に入ることになる。というのも、この群にはさまざまな変化が含まれているからである。まず *vêtir* であるが、これは本来 *vestir* であったものが、s が e のアクセントになったと考えられる。従って本来、*dormir* などと同変化であるべきものが、語幹末の子音は t のみとなって、いままら脱落することならず、残ってしまった。過去分詞も *vêtu* と *dormir* 型とは異なっている。

courir は *vêtir* と違って始めから語幹末の子音1個で、*vêtir* と殆んど同じ変化だが、単純未来(→条件法現在)で： *je courrai, tu courras* ～と違いをみせる。

同じ語幹末子音が1個の動詞で重要なのが *tenir* (<*teneo*), *venir* (<*venio*) の2動詞である。これらでは直説法現在単数と3人称複数(→接続法現在)で： *je tiens, tu tiens, ~ ils tiennent* と、語幹自体に音韻変化が起る。同単純未来(→条件法現在)も、単純過去(→接続法半過去)も不規則なのはよく知られている。

語幹に音韻変化が起るものとしては *acquérir, mourir* なども同じである。両者とも直説法単純未来(→条件法現在)の変化は *courir* と同系統、過去分詞は *acquérir* → *acquis, mourir* → *mort* となる。

過去分詞が *mort* と似た形をとるものに： *couvrir, ouvrir, offrir, souffrir* の4動詞がある。これらでは、語幹末に2～3個の子音群があるため、語幹に変化は起らない。加うるにこの4動詞は、直説法現在(→接続法現在)で -er 動詞なみの： -e, -es, -e, -ons, -ez, -ent 語尾をとる。

次にくるグループは～(a, e, ou) *illir* という終り方をする4動詞： *cueillir, assaillir, bouillir, faillir* で、そのうち *cueillir* と *assaillir* は前のグループと同じく、直説法現在(→接続法現在)で、-er 動詞型の変化をとる。いっぽう *bouillir, faillir* (v. *défectif*) は： *je bous, tu bous, il bout* といった具合に語幹に音韻変化を起す。

最後に残った重要なグループは、語尾が -ir ではなくて -oir⁽²⁵⁾ の： *vouloir* (<*volēre*), *pouvoir* (<*potēre*), *valoir* (<*valēre*), *falloir* (<*fallire*), *mouvoir* (<*movēre*), *pleuvoir* (<*plovēre*), *avoir* (<*habēre*), *savoir* (<*sapēre*), *devoir* (<*dēbēre*), *recevoir* (<*recipēre*) で、このうち *vouloir* ～ *mouvoir* の5動詞は直説法現在(→接続法現在)で音韻変化を起す他、語幹1終りの *vouloir, valoir, falloir* は単純未来(→条件法現在)で *je voudrai, tu vaudras, il faudra* ～と d をとる。いっぽう *avoir*⁽²⁶⁾ から *recevoir* までの4動詞は、直説法現在(→接続法現在)で： *j'ai, tu sais, il doit, ils reçoivent* と、語尾の -oir を生かしたような変化をとる。-oir 語尾の動詞の過去分詞は、いずれも u 終りである。

最後に語幹が子音終りで語尾が -re の動詞が残っているが、これは前項の子音終り -ir 語尾の群に較べると、ずっと規則的で始末がよい。この群の基本的特徴は、語幹と語尾の接点に、少なくとも2個、多ければ3個の子音の塊りができている点である。これは、もともと語尾の頭にあった母音が脱落したために起った現象であることは既に述べた。この群の代表

的な動詞は：rompre, perdre, rendre, répondre, などである。これらは、直説法現在で-s, -s, -t, -ons, -ez, -ent 語尾をとり、語幹に音韻変化も生ぜぬ、極めて規則的な動詞で、単純過去は i による変化、過去分詞は u をとる。

続いて、すでに-sc-型動詞の項で説明した⁽²⁷⁾：connaître, paraître, paître, naître, croître の各動詞がくる。これらの場合は、finir と異なって、不定法の中にすでに-sc-要素が-t⁽²⁸⁾-st- の形をとって現われているのであるから、直説法現在単数でも、その影響が何等かの形で出ても不思議はないのだが、⁽²⁹⁾いかんせんフランス語の-re 動詞の語尾-s, -s, -t では、-sts, -stt あるいは-sss, -sst と子音の三連続の塊りができるだけなので、結果において-ss-は finir の場合と全く同じ、直説法現在複数(→接続法現在)のみに現われることとなってしまった。

次にくるのは battre および mettre とその派生語で、ここでも語幹末に二連続している tt のうち、後の t が直接法現在単数で脱落、語末の三子音の連続を避けている。単純過去では battre は i による普通の変化をするが、mettre の方は：je mis, tu mis, il mit, ~ と、かなり不規則性を発揮する。過去分詞も mis と、u をとらない。

続く être は、aller と並んで、フランス語の不規則動詞の二大巨頭の一つであり、その複雑な変化は、ここで論ずる範囲を超えている。

次は vivre, suivre の 2 動詞とその派生語で、もともと語幹が短いのに、語幹末子音の v を落すため：je vis, tu vis, ~；je suis, tu suis, ~ と本当に形が短かくなってしまふ。vivre が単純過去、過去分詞とも vécu という不規則な形をとって変化するのも、短い語幹だからであると考えられる。

以下に続く動詞は直説法現在複数、とくに語幹の形がもっとも正確に表われる 1・2 人称で、何等かの意味で不定法と異なった形をとるものである。

まず最初が prendre とその派生語で、rendre と形は非常に似ているのに、複数で：n. prenons, v. prenez, ils prennent と、語幹末の d を落した形をとり、また過去分詞も pris と i をとるところが異なっている。

この prendre の、直説法現在複数で d を落す傾向を更に単数にまで拡大したのが：craindre, joindre, peindre など一連の動詞で、その直接法現在には：je crains, tu crains, il craint, n. craignons, v. craignez, ils craignent と、全人称で d を落している他、複数の語幹末に-gn-が現われ、prendre 型であることを示している。過去分詞も craint と不規則である。

また、この仲間に vaincre も加えることができる。直説法現在単数で語幹末の c が残り、同複数で c が qu に変ること、過去分詞が vaincu となる点などが、craindre 等と異なっている。

次にくるのが absoudre, résoudre など、直説法現在で語幹末子音 d が落ちるのは craindre 等と同じであるが、複数では：n. absolvons, v. absolvez, ils absolvent と、-ou-→-olv⁽³⁰⁾の変化が生じる。moudre も absoudre 等とよく似た変化をするが、こちらは直説法現在単数で、語幹末の d が脱落せず、複数では l は現われるが u→v の変化を生ずることはない。

最後に残ったのが coudre (<cosere < consuere) で、直説法現在単数で、語幹末の d が脱落せぬ他、複数でラテン語動詞にあった s が復活してくること、および単純過去で i をとって変化すること、以上の二点を除けば、absoudre, résoudre, moudre などと、

同型の変化をする動詞である。

また、これまでみてきたところによっても知られるように、過去分詞に関しては、-er 語尾の動詞、-i+r 終りの動詞については、それぞれ -é, -i の語尾を定めることができるが、-c+ir, -i+re, -c+r 終りの群については、-u が比較的有力であるということと以上に、規則的な語尾を定めることはできない。(c = consonant)

以上、フランス語動詞の変化について簡単にみてきたところをまとめたのが表Ⅲ-A・B である。従来の1~3群分類と異なる点は：(1) 動詞語幹が母音終り(特に i 終り)であるか、子音終りであるかという点を基準にして動詞を分けた；(2) ある群は規則動詞ばかりを、また別の群は不規則動詞ばかりを集めるといった方式をとらず、どの群にも、その群に特徴的かつ規則的な変化をする動詞を求めて上段におき、ついで準規則的变化、そして最後に不規則性の強い変化の動詞を下段に配列した、以上の二点である。A表では -er 終り(= 語尾)の動詞、-ir 終り(これは語尾と言うことは出来ない)の動詞、-re 終り(= 語尾)の動詞、という従来の分け方に比較的近い分類をとったのに対し、B表では -er 終りの動詞は別として、その他の動詞については、語幹が i で終りか子音終りかという基準で分類してみた。

表Ⅲ-A

verbes en "-er"		verbes en "-ir"		verbes en "-re"	
-e, -es, -e, -ons, -ez, -ent		-s, -s, -t, -ons, -ez, -ent			
-v+er	-c+er	-i+r	-c+ir	-i+re	-c+re
créer, agréer, étudier, nier, louer, ruer	aimer, chanter, parler		dormir } partir } sentir } 二重子音	rire -i- croire } traire } -y-	rompre } perdre } rendre } répondre } 三重子音
payer } employer } -y-	acheter, appeler répéter, avancer, manger	fuir, ouïr } voir, } asseoir, } decheoir } -y-			
		finir } haïr } -ss-		suffire, dire, } plaire, faire, } luire, nuire, } conduire, } traduire } -s-	connaître } paraître } paître } naître } croître } -ss-
envoyer	aller		vêtir, courir } tenir, venir, } acquérir, mourir, } couvrir, ouvrir, } offrir, souffrir, } cueillir, assaillir } boullir faillir } vouloir, pouvoir, } valoir, falloir, } mouvoir, pleuvoir, } avoir, savoir, } devoir, recevoir, } 語幹母音変化 -er 変化 -oir 語尾	écrire } boire } clore } conclure } -v- i-以外	battre, mettre être vivre, suivre prendre -n- craindre, } joindre, } peindre } vaincre -qu- absoudre } résoudre } moudre } coudre -s- 語幹末子音変化

表Ⅲ-B

-e, -es, -e, -ons, -ez, -ent		-s, -s, -t, -ons, -ez, -ent			
((-er)) 語尾動詞		語幹母音終りの動詞		語幹子音終りの動詞	
-v+er	-c+er	-i+r	-i+re	-c+ir	-cc+re
créer, agréer, étudier, crier, louer, ruer	aimer, chanter, parler,		rire -i	dormir partir sentir	rompre perdre rendre répondre
payer } employer } -y-	acheter, appeler répéter, avancer, manger	fuir, ouïr voir, asseoir } déchreoir } -y-	croire } taire } -y-		
		finir } hair } -ss-	suffire, dire plaire, faire luire, nuire } conduire } traduire } -s-		connaître paraître paître } naître } croître } -ss-
envoyer	aller		écrire } boire } -v- clore } conclure } i 以外	vêtir, courir tenir, venir } acquérir, mourir } 語幹母音変化 couvrir, ouvrir } offrir, souffrir } -er cueillir, assaillir } 変化 bouillir, faillir } vouloir, pouvoir } valoir, falloir } mouvoir, pleuvoir } avoir, savoir, } devoir, recevoir } -oir 語尾	battre, mettre être vivre, suivre prendre -n- craindre } joindre } -gu- peindre } vaincre } -qu- absoudre } résoudre } -l- moudre } coudre } -s-

いずれの場合にも -oir 終りの動詞を別個の群として立てる可能性が、〔wa〕という現代フランス語における発音上の変化⁽³¹⁾を考慮すると、残されている。特に -c+oir 型の動詞の場合にこの感が強い。しかし発音の問題だけからすると、-oir 終りを一分類とするなら、-aire 終りや -oire 終りの動詞も群として項目をたてねばならなくなってしまう。また -oir 語尾の動詞だけが存在するのならば、独立の項目をたてることも十分考えられるが、同じ -oir 終りでも voir, asseoir などは、-i+r 型であって、その性質が余りに違い過ぎるため、一括して同じ分類に入れ難い事情もある。更にいっぽうでは -i+re 型の動詞の中にも、clore や conclure など終り方が異なる動詞を含めていることもあり、ただ徒らに変化群を増やし、分類を複雑にするのも意味がないと考えられるので、-oir 語尾の動詞は -c+ir 型の中を含めることとした。

以上のような各種の検討を踏まえて、筆者が提案するフランス語動詞変化分類は、表Ⅳの如くである。表の上段に「基準動詞」として掲げたのは、各群の中で同型の変化をする動詞が多く、かつ語幹に何等の変化なしでそのまま語尾がつく動詞を選んだ。ただし語幹末が母音 i 終りの動詞では、先程来くり返し述べた発音上の困難を避けるための手段として、-ss-

ないしは -s- が語尾との接点に登場してくる動詞の方が数において断然優勢であるので、そちらを基準動詞としたわけである。

表 IV

分類	-er 語尾	-ir 終り		-re 語尾	
語尾接続	-+er	-i+r	-c+i+r	-i+re	-c+re
直・現	-e, -es, -e, -ons, -ez, -ent	-s, -s, -t, -ons, -ez, -ent			
基準動詞	parler lier	finir -ss-	dormir } partir } sentir } 二重子音	suffire,dire } plaire,faire } luire,nuire } conduire } traduire } -s-	rompre } perdre } rendre } répondre } 三重子音
準・基準動詞	acheter, appeler, payer repéter, avancer, employer manger	haïr -ss-			
不規則動詞	envoyer aller	fuir } ouïr } voir } asseoir } décheoir } -y-	vêtir,courir } tenir,venir } acquérir,mourir } couvrir,ouvrir } offrir,souffrir } cueillir,assaillir } bouillir,faillir } -er 変化	rire -i- } croire } traire } -y- } écrire } boire } -v- } clore } conclure } i 以外	battre,mettre } être } vivre,suivre } prendre -n- } craindre } joindre } peindre } vaincre -qu- } absoudre } résoudre -l- } moudre } coudre -s- } connaître } paraître } paître } naître } croître } -ss- } 語幹末子音変化
			vouloir,pouvoir } valoir,falloir } mouvoir,pleuvoir } avoir,savoir, } devoir,recevoir } -oir 語尾		

こうしてみると、フランス語動詞変化の一番の問題点は -ir 終りの動詞にあることが判る。-er 終りと -re 終りの動詞の場合は、-er, -re は文字通り語尾である。不規則動詞が 2 個しかない -er 動詞の場合は別としても、-re 動詞の場合でさえ、不定法の形から一見してその動詞が母音終りの語幹のものか (-母音+re), または子音終り (-子音+re, つまり r を含んだ最少 2 個の子音の連続がある) かを知ることができ、それぞれの場合に対応した変化の型 (母音終りなら直説法現在複数で、語尾との接点に -s- なり、他の子音を入れるかどうか; 子音終りなら直説法現在単数で、語幹末子音をどこまで脱落させるか) を考える手掛りが一応あることになる。

しかるに -ir 終りの動詞の場合には、語の終りの部分に 2 個以上の母音 (ただし -oir は除く) あるいは 2 個以上の子音がかかる動詞: fuir, ouïr; dormir, couvrir, cueillir などは別であるが、子音が 1 個だけのもの、すなわち finir と tenir をとってみて、どちらが -i+r 型で、どちらが -c+i+r 型であるかを知ることが出来ない相談である。

さらに先程除外した -oir 終りの動詞についても、-oi+r 型と、-e+oir 型 という、外見は似て、内容が非常に異なるものがこの群に混在しているという事情もある。従って、-ir 終りの動詞、特に語幹子音終りで、その子音が1個の不規則動詞をよく憶えることがフランス語動詞の変化をものにする要点になると考えられる。⁽³²⁾

むろん、本稿の冒頭に引用したコンディアックの言葉が示す通り、動詞変化などというのは、しゃせん体当り、慣れで身につけるものであることに違いはなかろう。しかし、成年に達した者が、外国語としてフランス語を習得しようとする時、少しでも効率的な方法により、機械的な動詞活用暗記に割かれる労力を省き、もって他のより抽象的な理解力を必要とするところに力が注がれることを希って、動詞変化の再分類を試みてみた次第である。表Ⅳについて、大方の御批判、御意見を、お聞かせいただければ幸いである。

注

- (1) フランス語動詞の総数については、土居寛之著「フランス語動詞活用表」(Précis de conjugaison des verbes français)(朝日出版社)で、土居先生が Larousse 社の「動詞活用ガイドブック」を引いて述べておられる。それによれば、「ラルース大百科」(Grand Larousse encyclopédique, 10 vols & suppl.) と「大ローベル仏語辞典」(Dict. de la langue française de P. Robert, 6 vols & suppl.) に収録されているフランス語の全動詞は、卑語を除いて 7957 語であるという。しかし alunir (月に着陸する < aterrir), twister (トウィストを踊る) など新しく作られる動詞、消えて行く動詞もあるからその数は正確には決められない。
- (2) 土居寛之著「フランス語動詞活用表」, 東京, 朝日出版社, 1977年. cf. p. 7.
- (3) Le petit Robert, Société du Nouveau Littre, Paris, 1967, cf. p. 1957 sq. また Dict. du fr. contemporain, Larousse, Paris 1971, pp. X ~ XVIII でも動詞を: (1) -er 語尾, (2) finir 型の -ir 語尾, (3) それ以外の動詞, という 3 群分類にしているが, それでも第 1 群に envoyer, aller を, 第 2 群に haïr を含ませる程度のことにはしている。
- (4) Randle Cotgrave: A Dictionarie of the French & English Tongues. (Reprint of the 1611 edition, Univ. of South Carolina Press, 1950), cf. Fol. 4: A Table of the Conjugations of perfect Verbes.
- (5) むろん, これには例外があり, フランス語第 1 群動詞の全てが, ラテン語で -āre 動詞だったわけではない。このことは第 2・3 群についても当嵌る。例えばラテン語第 II 変の典型的な動詞として挙げられる moneō (忠告する) は, フランス語では admonester となって第 1 群 (イタリア語では ammonire で第 3 群) に入っている。いっぽうラテン語の habeō (第 II 変化) は, むろん avoir で第 3 群, またラテン語第 III 変化の代表によく挙げられる agō は, フランス語では agir となって第 2 群といった具合である。
- (6) ラテン語の第 I 変化では, 語幹が母音終りの動詞は, そう多くない (後期になって deviāre, inviāre など, 母音終りの -āre 動詞が新造語で出てくる傾向にある) が, いったんフランス語に入ると, ラテン語動詞の語幹末子音の脱落現象が起って, その結果, 母音終りの語幹を持つ動詞の数はかなり増える: crier (< quiritāre), lier

(<legāre), nier (<negāre), louer (<laudāre), louer (<locāre),
rouer (<rotāre), ruer (<rutāre <ruere), tuer (<tutāre <tutāri),
etc.

- (7) むろん、注(5)で挙げた agir のような例もあることは、いうまでもない。
- (8) ここに括弧つきで掲げた -ss- が、本稿の標題に掲げた -sc- と同じものに他ならない。これについては、先に行って (cf. p. 14) 述べる。
- (9) 第3群の dormir 型の動詞では、i は直説法現在を始め、多くの変化形に姿を現わさない。つまり語幹の一部ではないわけである。
- (10) むろん、現行の動詞変化分類では、-er 型不規則動詞の雄 aller (<ambulāre + vadāre + ĩre) と、もう一つの不規則動詞 envoyer (<inviāre) がこの群に入っていることも忘れてはならない。
- (11) III : courir (<rruere), offrir (<offerre) ; III b : recevoir (<recipere → recipio), etc.
- (12) 直説法半過去で v や b が脱落するのは、cantāre (= chanter) の変化では、表に掲げた4言語のうちフランス語だけであるが、その下の habēre (= avoir) の変化では、スペイン語が había, habías, ~ となって、やはり b を脱落させている。イタリア語でも Dante に : Tutte le stelle già de l'altro polo / vedea la notte, e 'l nostro tanto basso, / che non surgea fuor del marin suolo. (Inf. XXVI, vv. 127 ~ 129) とある。下線を施した vedea は、現代語なら vedevo (半過去 1 人称単数), surgea の方は surgeva (同 3 人称単数) で、いずれも v を落している。
- (13) この itératif (~ し続ける, 繰返し ~ する) という -ss- 要素の働きは、研究者によれば、ヒッタイト語のみに見出されるという。cf. P. Monteil : *Elément de phonétique et de morphologie du latin*. (éd. Nathon, Paris, 1973), p. 290.
- sk- 要素については、本稿の冒頭に言及した島岡先生の論文 (本誌, 12 号, 東京, 1980, pp. 96 ~ 101), 上記 P. Monteil : *Eléments phonétiques etc.*, pp. 289 ~ 291) の他に, G. Rolfs : *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*, 3 vols, Piccola Biblioteca Einaudi 148 ~ 150 ; vol. II, *Morfologia, Ampliamento del tema*, §§ 523 ~ 525, Torino, 1970 ; H. Lausberg : *Romanische Sprachwissenschaft*, Band III *Formenlehre*, D. Vierte Konjugation §§ 919 ~ 923, などを参照のこと。
- (14) 前掲・島岡論文, p. 96.
- (15) もしも -sc- 要素が附加されずに直説法現在の変化が行われた場合は : sēnto - sēnti - sēnte - sentiāmo - sentite - sēntono という sentire の例にみられるように、単数と3人称複数のアクセントの位置が、不定法や1・2人称複数のアクセントの位置から1音節前にズレることになる。
- (16) 例えば Fr. Villon : *Le Lais*, XXXIX には : Puis que mon sens fut a repos / Et l'entendement demeslé, / Je cuidé finer mon propos ; / Mais mon ancre trouvé gelé / Et mon cierge trouvé soufflé ; /

- De feu je n'eusse peu finer ; / Si m'endormis, tout enmouflé, /
Et ne peux autrement finer. (vv. 305 ~ 312) に 3 度出てくる finer は、
2 番の finer (→ finer de = se procurer, venir à bout de (Godefroy))
は意味が少しズレるが、いずれも現代語の finir に当る動詞で、Villon (1431? -
1465?) の時代には存在していたのに、finir に駆逐されてしまったのである。
- (17) cf. 島岡論文, p. 98 sq. 新造語として -ir を用いた代表的な例に : alunir (月
に着陸する) < amerrir < aterrir がある。
- (18) cf. A. Lanly : Morphologie historique des verbes français, Bord-
as Etudes, Paris, 1977, p. 165.
- (19) cf. Ibid., p. 144.
- (20) cf. P. Monteil, op. cit., p. 290, 2°
- (21) cf. 島岡, art. cit., p. 99, O. Bloch & W. von Wartburg : Dict. ety-
mologique de la langue fr., P. U. F., Paris, 1949, haïr の頃。
- (22) dire については、その直説法現在 2 人称複数 は dites であって -s- が現われない
のは周知の事実である。だが dire の合成語 contredire, dédire, interdire,
médire, prédire では : vous contredisez, vous médisez, etc. と -s-
が現われる。更に maudire に関しては : vous maudissez と -ss- まで登場する
ほどである。
- (23) 同種の変化をするものとしては : abstraire, extraire, soustraire, etc. が
ある。
- (24) 同種の変化をするものとしては : déclore, éclore, etc. がある。
- (25) この中には、ラテン語で velle (<vouloir), posse (<pouvoir), fallere
(<falloir), pluere (<pleuvoir) など、すでに不規則な変化をしていたもの
が含まれている。
- (26) avoir は nous avons, vous avez という形からすると、語幹が子音終りという
ことになるが、他の変化 (e. g. j'ai ; que j'aie, que tu aies, qu'il ait,
que nous ayons, que vous ayez, qu'ils aient ; aie !, ayons !, ayez !,
ayant) では、語幹が i 終りのような形もみせる。単純過去や過去分詞では eu と u を
用いた変化も示す。ラテン語の b から始まって : be → ve → ue → e → i となる過程の各
部分を表わしているのであろうか。
- (27) cf. p. 15.
- (28) -sk-要素中の k が t に転化する過程については : (i) E. & J. Bourciez : Pho-
nétique française, étude historique, § 115 に, *nascere → nascre →
naître といった変化の中で, sk > st > st と t が k に代って出てくるとする (P. Fouché
: Phonétique historique du fr. も同様の説をとっている) ; (ii) A. Ewert
: The French Language, § 100, 不定法語尾, 後から 2 番目の e の脱落によって
起る 3 子音連続の過程において [k] が脱落し, 新たにワタリの子音として t がでてくる ;
などの説がある。
- (29) じじつイタリア語では : crescere → cresco, cresci, cresce, cresciamo,
crescete, crescono と, 直説法現在の変化全体に -sc- 要素が顔を出している。ス
ペイン語でも : conocer → conozco, conoces, conoce, conocemos,

conocéis, conocen と、語尾が o で始まる 1 人称単数では conozco と -sc- 要素が現われてくる。むしろ 2 人称単数以下でも conozces, conozce, conozcemos ~ という形があったであろうが、-zce- が次第に -ce- に変わって行ったと考えられる。

- (30) これは absoudre < absolvere と、ラテン語の形が復活してくるわけである。
- (31) -oi- はいつでも [wa] と発音されていたわけではない。17 世紀においてさえ Académie française を [frāswe:z] と発音するか [frāswa:z] と発音するかという問題が起り、後者よりも、むしろ前者がとられたという事実がある。oui を *öil* [oil] と発音した langue d'oïl の人達は、フランス語に -oi- を [oi] とした場所と時期があったことを示している。
- (32) もちろん、その他にも、いくつかの群、例えば -oir 語尾の群； -c+ir で直説法現在が -er 語尾動詞と同変化をするもの； -c+re で語幹末子が -n- あるいは -gn- になるもの；さらに過去分詞→単純過去→接続法半過去といった変化の系列も問題として残っていることはいうまでもない。

参考書目

- 島岡茂：「ロマン語における -sc=型活動について」, ロマン語研究・12号所載, 日本ロマンス語学会, 東京, 1980年。
- 土居寛之：「フランス語動詞活用表」, 朝日出版社, 東京, 1977年。
- 三宅・河村：「フランス語動詞の活用」, 大修館書店, 東京, 1958年。
- 荒木・井村・篠沢・鈴木：「フランス語動詞の活用」, 大修館書店, 東京, 1970年。
- 田島清編：「標準フランス語動詞変化表」, 白水社, 東京, 1974年。
- Bescherelle Ainé : L'art de conjuguer ... pour tous les verbes de la langue française, libr. classique internationale, Paris, s. d.
- André Lanly : Morphologie historique des verbes français, Bordas Etudes, Paris, 1977.
- Pietro Elia : I verbi italiani, Mondadori, Milano, 1958.
- Christopher Kendris : 201 Spanish Verbs, Barron's Educational Series, Inc., Woodbury, N. Y., 1963.
- Juillard-Edwards : The Rumanian Verb System, Mouton, Paris, 1973.
- Randle Cotgrave : A Dictionarie of the French & English Tongues, Reprint of the 1611 edition, Univ of South Carolina Press, 1950.
- Bloch-Wartburg : Dictionnaire étymologique de la langue française, PUF, Paris, 1949.
- Paul Robert : Petit Robert, Société du Nouveau Littré, Paris, 1967.
- Dubois, Lagane & autres : Dictionnaire du français contemporain, Libr. Larousse, Paris, 1971.
- Felix Gaffiot : Dictionnaire illustré latin-français, Libr. Hachette, Paris, 1934.

- 井村順一：「フランス語講座－6：文法」，大修館書店，東京，1973.
- P. Monteil : *Eléments de phonétique et de morphologie du latin*, éd. Nathan, 1973.
- H. Lausberg : *Romanische Sprachwissenschaft, Band III Formenlehre*, Walter de Gruyter, Berlin, 1972.
- Gerhard Rohlfs : *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti, Vol. III Morfologia*, Piccola Biblioteca Einaude-149, Torino, 1970.
- A. Ewert : *The French Language*, Faber & Faber, London, 1969.
- E. & J. Bourciez : *Phonétique française, étude historique*, éd. Klincksieck, Paris, 1974.
- P. Fouché : *Phonétique historique du français, 3 vols*, éd. Klincksieck, Paris, 1952.
- Dante Alighieri : *La Divina Commedia, Inferno*, comm. da Carlo Grabher, Principato Editore, Milano, 1965.
- François Villon : *Ouvres*, éditées par A. Lognon & L. Foulet, Libr. Champion, Paris, 1964.